

随筆

さまざまなアメリカ

加藤 哲郎

ジャーナリストの本多勝一氏は、アメリカ合衆国を「合州国」とよぶ。確かに、アメリカといっても広大で、東部、西部、中部、南部は、ずいぶんちがう。州毎に法体系を持ち、交通法規も、消費税率も異なる。州をこえては、学校制度も違うし、銀行は支店をもてない。その伝でいくと、アメリカには、いろいろなネーミングが可能だ。「合種国」「合宗国」「合秀国」「合醜国」……。

1986年夏からこの春まで、私は、アメリカに滞在していた。幸運なことに、同じ年のフルブライトとハーバード・イエンチンのスカラシップに両方合格し、日米教育委員会とハーバード・イエンチン研究所に無理をお願いして、西部カリフォルニアのスタンフォード大学でフルブライト・プログラムを終えてから、東部マサチューセッツのハーバード大学へと移り、アメリカ大陸の両側での生活を、体験できた。中部や南部は旅行だけだったが、「合州国」の広さと多様性は、実感できた。1987年2月に、スタンフォードで半袖・短パンでフェアウェル・テニスをした翌週末には、アノラック・ブーツ姿でハーバードの近くのスキー場にでかけたのだから。

もっとも、気候だけなら、沖縄・北海道でも同じだろう。3時間の時差も、若い学生諸君なら気にならないだろう。しかし、サンフランシスコとボストンの街角にしばしたたずみ、人々の歩くテンポやドラッグ・ストアの店員たちの英語、通りすぎる肌の色やファッションを比べてみると、必ず「合州国」を見出せるだろう。ただし、ニューヨークではだめである。ニューヨークは世界都市であり、あまりにミクスされすぎているから、むしろ、東京やロンドン・パ

リと、近しく感じるだろう。

よく知られているように、合衆国は、「合種国」である。つまり、移民の国、人種のルツボだ。シスコならメキシコ系をいっぱい見かけるし、アジア系も多く、日本人で一人でも、違和感は少ない。ワスプの建国の地、誇り高きニューイングランドでは、そうはいかない。最近ではスペイン語系・アジア系も増えているとはいえ、やはりホワイトの街だ。地方新聞を読むと、いっそうよくわかる。環太平洋の一部である「サンノゼ・マーキュリー」とヨーロッパに面した「ボストン・グローブ」では、同じ日米貿易摩擦の記事でも、随分ちがった印象を受けるだろう。

「合種国」は、「合宗国」でもある。この国の人々にとっての、宗教の持つ意味は、「雑宗国」からきた無神論者には、わかりにくい面もあったが、折りからの大統領選挙予備選の世論調査には、性別・地域別・人種別・階層別などとならんで、宗派毎の支持率が発表される。日曜朝のテレビは、各宗派競いあつての説教ばかりだから、いやでも、宗教の重みを思いしらされる。

人種も宗教も多様なこの国には、世界中から自由と仕事とチャンスを求めて、さまざまな肌の色と言語と宗教を持った人々が集まる。だから、「合秀国」になる。スタンフォードやハーバードには、とりわけ優秀な人々が集まってくるから、研究会やパーティでは、肌の色や宗教は気にならない。

しかし、キャンパスから数ブロック離れてみると、そこには、「合醜国」がみえてくる。適者生存の「自由競争」は、上昇できればハッピーだが、下層に沈没する人も少なくない。教会や地下鉄のそばの物乞い、厳冬のビルの片隅のホ

ームレス、スラムに無法ゾーン、殺人・強盗・レイプ、ドラッグにエイズ、およそ人間社会のあらゆる悲惨・醜悪なものが、豊かさや幸運のすぐそばに、同居している。

ついでにいえば、この国は、いまや世界の生産物の大消費マーケットであり、世界の胃袋でもある。だから「合酒国」となり、世界中のアルコールや味を楽しめる。ハーバードには、私の滞在中、商学部の廣本、経済学部の田近、法学部の中里の諸先生も留学中で、経済研究所の久保庭先生が学会で来た時には、全学教授会と称して、この「合酒国」を楽しんだ。

しかし、やはり合衆国は、「合衆国」だ。ニューハンプシャーのスキー場では、日本のゲレンデとちがって、誰もウェアなど気にせず、ジャンパーにジーンズで気ままに滑っている。東北育ちの私の、クリスチャニアにはほど遠い山スキーでも、誰も冷やかしたりはしない。そこに雪があるから自分の流儀で勝手に楽しく滑る、それでいいのだ。おまけに、貸スキーもリフト代も日本の半額以下、これこそが、さまざまな人々が自由にのびのびとコミュニケイトできる「合衆国」のよさであり、豊かさであり、底力だろう。

この夏も、多くの学生諸君が、アメリカにでかけるだろう。バック旅行の定食コースや円高便乗のショッピングばかりでなく、ぜひとも、さまざまなアメリカ、文字通りの合衆国を体験し、コミュニケイトしてきてほしいものだ。

(社会学部助教授)

